

What are you made of ?

梅田 礼子

1. はじめに

“What are you made of ?” —もう10数年前だったろうか、雑誌で見た時計の広告の言葉です。「あなたは何で出来ていますか？」ドキッとする問いかけ、この広告では「身なりを整え、ぜひこの（高級）時計を身につけましょう」というわけです。単に「オシャレしましょう」でない、「他人はあなたのことを身なりでも判断しますよ、身につけているものもあなたの人格を作るのですよ」というニュアンスですね。また、食品の広告でもこの問いが使われているのを見ました。今度は「あなたの身体を形成するのはあなたが摂っている食べ物なのだから、安全で良質な食べ物を食べましょう（買いましょう）、この商品のように」ということになります。

このように、人としての本質を問う表現です。現在のみなさんは何で出来ているのでしょうか？

2. 教養＝知識？

9♦

昨秋、アメリカの大統領選挙についての記事に面白い話がありました。支持する候補者を聞き出したいとき、単刀直入に聞いては、センシティブなことだから答えない、または実はまだ決めていないから答えられない、が起きる。そこで、「どちらの候補者と一緒にビールを飲みたいですか？」と聞くと、本音を聞き出すことができる、というものです。一緒にビールを飲みたい、つまり、「面白い話が聞けそうだ」と思っているからです。皆さんは、もし今、初対面の人と30分コーヒードrinkしながら雑談してみて下さい、と言われたら、どんな話をしますか？ 話すネタを持っていますか？

話をしていて面白いと思える相手はどのような人ですか？ 例えば、TVで見るいろいろな人の中で、「この人と話してみたいなあ」と思う人はいますか？

「教養とは何か」という定義は難しいと思うのですが、私は、「話していて面白い人」が「教養がある人」だと思っています。では、そういう人を形作っているのは何なのでしょう？ クイズ番組でなんでも即答して「クイズ王」と呼ばれる人たちがいますよね。いろいろなジャンルにわたって知識が豊富で、「すごいなあ」と思います。では「教養＝知識（量）」なのでしょう吗？

知識量なら、コンピューターには敵いませんね。人間の記憶力には限界がありますが、コンピューターはたくさんの情報をストックしておくことが出来て、検

索すれば必要な情報を即座に引っ張り出すことが出来る。さらに、調べものだけでなく、例えばメキシコの郊外に遺跡を見に行くぞ！と思えば、日本に居ながらローカルバスの時刻表を調べて、予約する、しかもすべてスマホ上で、なんてこともできるわけです。大変便利な世の中です。

3. 「情報の洪水」の中で生きる難しさ

しかし、ここに落とし穴もあります。片手に収まる小さなガジェットで世界のあらゆる情報を手に入れることが出来る便利な世の中、しかし、逆に、それだからこそ生きてゆくのに難しいこともあります。

まず、「人との差別化」の難しさ、です。インターネットが無かった時代には、例えば欧米を訪ねて情報をいち早く仕入れて来たら、日本でお金儲けして成功することが出来た。（ファッションを考えると分かりやすいですね。（成功＝お金儲けなのか、はまた別の話として。））それが、現代では、インターネットを使える人なら誰でも同じ情報を手に入れることが出来るのです。

また、インターネットにはあらゆる情報が「どさっと」出ている¹⁾ので、より良い情報を「見分ける力」が必要です。正しい、ためになる情報も、誤った情報、時には悪意ある嘘情報も、検索すればほぼ同列に上がって来ます。「ニュース」でさえ、どれが正しいのか、事実は何か、が分かりにくくなっています。（某国の大統領はよく「フェイクニュースだ!」と言っていますね。ちょうどこの原稿を書こうとしていた2021年1月6日、現職大統領の支持者が暴徒化し、アメリカ合衆国議会議事堂になだれ込むという事件が発生しましたが、直後には「死傷者はいない、警官が亡くなったという情報はデマだ」という情報もあり、実態がなかなか分かりませんでした。多くの記事が出始めた後も、私には基礎背景知識が少ないせいもありますが、「真相」が分かりにくい²⁾です。）

このように溢れる情報の中から適切な情報を見分けるのは大変な作業です。情報を鵜呑みにするのではなく、疑ってかかるくらいの慎重さが必要³⁾ですね。

インターネットが無かった時代には情報源と言えば「本」「新聞」「百科事典」で、それらには重大な誤りのある情報や悪意ある嘘情報というのはさほどなかったはずです。

そういう意味で、「ネットでみんな同じ情報が取れる」「調べたい事のほとんどはネットに出ている」現代に生きる皆さんは、昔よりも「魅力的な個人」になるのが難しい環境にあるわけです。

また、気をつけたいのは、確かにネット上にはさまざまな情報がありますが、古い文献などで、まだ収録されていない資料もあること（ネットは万能でもない）。そして、もっと根源的には、当たり前なのですが、「調べたことしか出てこ

ない」、「調べようとしなかったことは出てこない」のです。つまり、調べる側が万能とは限らないということ。

(このあたりのさらに詳しい情報、「調べる」「読書の重要性」などは後の参考文献をぜひご自身で読んでみて下さい。)

4. インターネットのある現代にこそ重視される「考える力」

情報の洪水から、利用価値のありそうな情報を見つけられたとして、それで終わり、ではないですね。その情報を用いて、何をするか？ 何をどう考えるか？ が重要です。

知識が豊富であることの優位性がインターネットの登場によって、ほとんどなくなりました。そこで、「考える力」が以前よりも重要になってきている。また、逆に、インターネットに依存し過ぎて「調べたけどなかった」、とそこで思考停止してしまう、という、現代ならではの新たな問題も出てきています。

「地頭力」(じあたまりよく)という言葉が広まったのは、おそらく細谷(2007)がきっかけではないかと思います。細谷(2007)は「頭の良さ」を「物知り」「機転が利く」「地頭がいい」の三種に分け、地頭力の三つの思考力のベースを「論理的思考力」「直観力」「知的好奇心」の三つと定義しています。

そして、「地頭力」を鍛えるツールとして「フェルミ推定」を紹介しています。フェルミ推定とは、『『東京都内に信号機は何基あるか?』『世界中にサッカーボールはいくつあるか?』といった、把握することが難しく、ある意味荒唐無稽とも思える数量について何らかの推定ロジックによって短時間で概数を求める方法』とのこと。(「ノーベル賞物理学者エンリコ・フェルミが、自身がこうした物理量の推定に長けていたとともに、教鞭を取ったシカゴ大学の講義で学生にこのような課題を与えたことから、彼の名を取ってフェルミ推定と呼ばれる」) 詳細について、私のフィルターを通してここで紹介するより、直接各自で細谷(2007)に当たってみられることをお勧めします。

え？「メンドクサイから調べない」「そんな問題、ネットでググればいいやん。考えろ、ったって、何の情報もないやんか」って？ はい、そういう方にこそ、この本は読んでみてほしいです。(コロナ禍で本を図書館や書店で探しに行けない場合、この話を解説した記事がネット上にもいくつか出ていましたよ。)

ついでながら、3節「読書の重要性」で参考&お勧め文献として挙げた成毛(2008)にも、目次を見たら「地頭がいい人、悪い人」という項目があったので、そこを開くと…。おっと、ネタバレ(spoiler)になるので、これもぜひご自身で見えて下さい。

4.1. 例えば考えてみたい問題

新型ウィルスが広まった昨年春、極度にこのウィルスを恐れ、他人の行動を監視したり、行き過ぎた注意をしたりする「自粛警察」「マスク警察」と呼ばれる人たちが出ました。そういう現象が起きたことについてはネットに記事が溢れています。では「なぜ」そのようなことが起きたのでしょうか？

また、この2年前だったか、には、芸能人の不倫がメディアを賑わせ、SNSで一般人がその芸能人たちを「叩く」現象が起きました。(私は元々芸能人の結婚のニュースすらあまり興味がないので、そこまで他人のことが気になる人たちがいることに驚きました。でも、「なぜか」については大変興味があります。)

そして、毎年のように、いじめを受けた子供たちが自殺してしまうという悲劇が起っています。子供に限らず、大人の被害者もありました。

これらに共通して、「同調圧力」があるのでは、と思っています。特に、いじめについては、「いじめが良くない」ことは誰でも分かっている、なのに起きてしまう。だから、単に「いじめは良くないことです。だからやめましょう」と言ったところで、なくなるわけではないのです。禁止を叫んだところで、根本原因を探らないことには解決には至らないでしょう。古荘 (2009)「日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか」が、これらの問題を考えるヒントになりそうに思っています。

このように、複数の問題を眺めて、関連がありそうだと考えてさらに調べ、考えてみることも、「地頭力」の一つではないかと思います。「調べたことしか出てこない」ので、「新型ウィルスのマスクの問題」だけを見ていては、見つけれない情報・思いつかない考え、もあるかもしれない、ということです。

5. おわりに

コンピューターやインターネットなどの技術が発達しても、やはり人間の「複合的に見る」「体系を見通す」「深く考察する」といった力が重要であることは変わらず続くでしょう。知識だけでなく、これらも含めたものが「教養」なのではないでしょうか。皆さんはどう思われますか？

とりとめのない文章となり、答えを書いていない部分もあります。それは「原稿締切りが近いため」ではなく、「全ての情報を与えてしまうのではなく、皆さん自身に調べ、考えてもらうため」である、ということにしておきましょう。

So, what are you made of?

注)

¹⁾ 関沢 (2010、pp.3-4「はじめに」) が、2009年7月発表の総務省「情報流通インデックス研究会」の報告書内容を挙げている。

電話、インターネット、放送、郵便、印刷出版、CD・ビデオゲーム・ゲームソフトの6種類の「流通情報量」(私たちの手元に届いた情報量)は、2001年に比べ、2007年は「平均1.6倍」の伸び率。そのうち、インターネットは35.7倍の伸び率。しかし、インターネットについて、実際に私たちが情報を認知している(受け止めて実際見た)「消費情報量」は2001年に比べ、2007年は1.9倍だったとのこと。2倍近くインターネットにアクセスする量は増えているが、「流通情報量」は35.7倍なので、「この差が、情報洪水となって私たちに押し寄せている」

²⁾ 次のように、警察が? 政府が? 何らかの糸で、暴徒たちの侵入をあえて止めなかったのではないかと示唆する記事もある。

「オンラインでは、議会の警備員や警察が、トランプ支持者らを止めることなく建物の中に素通りさせている動画も出回っている。中には侵入者と一緒に記念撮影に応じている警察の様子を写した動画も。

アメリカの首都で取材しているとわかるが、ホワイトハウスや連邦議会など政府の主要な建物は常にテロの危険性があるために、普段から厳重な警備が敷かれている。またデモなどイベントなどがある際には、すでに述べた通り、さらに警備を増やしたり、フェンスを追加するなど警戒が高まる。冗談でも近づこうものなら撃ち殺されても仕方がない——そんな空気すらある。

にもかかわらず来ると分かっていただいた人たちに侵入を許したのは、やはり腑に落ちないものがある。

少なくとも、テロ集団に対峙するような強硬な対策が取られなかったのは事実だ。」

山田敏弘「アメリカ議会襲撃は阻止できた? 今も残る違和感」、Forbes JAPAN 2021年1月13日 7:00

³⁾ 「え? でも、Wikipediaならネット上の百科事典だから正しいでしょ?」という声が聞こえてきそうです。「正しい」のでしょうか? そもそもWikiって何でしょう? Wikipediaによる“Wikipedia”項目の説明は「信頼されるフリーなオンライン百科事典、それも質・量ともに史上最大の百科事典を、共同作業で創り上げることを目的とするプロジェクト、およびその成果である百科事典本体です」となっています。「～を目的とする」であって、進行中なのです。

皆さんがWikipediaを利用するのは、何かを検索して、結果の上位に挙がってきてその項目を読む、「だけ」ではないかと思います。一度、Wikipediaの「方針とガイドライン」を見てみて下さい。

その前に、方針の一つとして「可能な限り検証可能で信頼できる出典を明記する」こと、「中立的な観点に基づくこと…どの観点も『真実』や『最良の観点』として紹介しないように」ということが謳ってあります。つまり、記載されたことについて、自分で検証し、考えることが大切です。出典が明記されているので、可能な限り原典を読んでみる必要があります。

参考文献かつお勧め文献

「調べる」 お勧め順

1. 関沢 彦彦 (2010)「いまどきネットだけじゃ、隣と同じ!『調べる力』」、明日香出版社
2. 千野信弘 (2005)「図書館を使い倒す! ネットではできない資料探しの『技』と『コツ』」、新潮社
3. 久慈力 (くじ つとむ) (2008)「図書館利用の達人—インターネット時代を勝ち抜く」、現代書館
(著者はノンフィクション作家・歴史研究家。約40年で数万回図書館を利用、北海道から沖縄まで全国で数百館、国会図書館だけで数千回。50万冊以上の書籍、雑誌を利用、その98%は図書館利用。)

「読書の重要性」

成毛眞 (2008)「本は10冊同時に読め!」三笠書房・知的生きかた文庫

「考える」

細谷功著 (2007)「地頭力を鍛える問題解決に活かす『フェルミ推定』」、東洋経済新報社

「心理」

古荘純一 (ふるしょうじゅんいち) (2009)「日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか—児童精神科医の現場報告」光文社

参考記事

山田敏弘 (2021)「アメリカ議会襲撃は阻止できた? 今も残る違和感」、Forbes JAPAN 2021年1月13日 7:00 (1月18日22時閲覧)